

法悔蓮の教學試験発心教材②／開目抄 問答篇(一) 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「夫れ一切衆生の尊敬すべき者三あり……これをいだけり」(186^年1行目～189^年3行目)の御文について、あとの問に答えなさい。

問一 「主師親」(186^年1行目)について、具体的かつ簡潔にそれぞれ説明しなさい。

さらに、主師親三徳の考え方・宗教のあり方について、「革命的な転換」がなされている御文を、御書より選び答えなさい。

主||

師||

親||

御文||

問二 諸仏のなかで釈迦仏のみが主師親の三徳を具備していることを示されている御文を、御書より選び答えなさい。

問三 「儒家には三皇・衆生を度す等云々」(186^年1行目～188^年5行目)の大意について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

儒家などの中国の諸思想の教えは、□に限られていて、□にわたる□を欠くため、□の□は得られないという限界を示されている。その一方、これらの教えは「□」であるとされ、仏教が広まるための導入の意味をもつていた」とを明かされている。さらには「バラモン教などの□において、一應、□や□を説いて□の□を立ててはいるが、□・□を決定する□の□については正しく説き明かしていない」とを示された。その結果、□の□からはずせないと指摘されたいる。また一方で、「これらの思想・哲学が仏教へ至る入口となつてゐること」を指摘されている。

問四 「嬰兒」(188^年7行目)・「大人」(188^年12行目)は、それぞれ何を譬えたものかを、本抄より選びそれぞれ答えなさい。

嬰兒||

大人||

問五 「但し仏教に入て……懷うべし」(188^年14行目～18行目)では、どのようなことを明かされているか、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

問六 「未顯真美」・「要當說真美」(188^年16行目)をそれぞれ簡潔に説明しなさい。

未顯真美||

要當說真美||

問七 「此の経に二箇の大事あり」(189^年1行目)について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

問八 「一念三千の法門は但法華經の本門・寿量品の文の底にしづめたり」(189^年2行目)を、三重に冠して答えなさい。

權実相對||

本迹相對||

種脫相對||

問九 「天台智者のみこれをいだけり」(189^年3行目)について、天台の「摩訶止觀」の一説を引用している御文を、「觀心本尊抄」より選び答えなさい。

法華蓮の 教学試験発心教材③ / 開目抄 問答篇

〈青年部 教学試験2級対応版〉

法華蓮

問 「一念三千は……那由佗劫なり」等云々（189ページ4行目～197ページ9行目）の御文の大意について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。また、□Aにあてはまる法華経の經文を、本抄の御文を参考に答えなさい。

◆「一念三千は……次上の心なり」（189ページ4行目～17行目）

冒頭に「一念三千は□より」とは「まればり」と、□は、□に説かれる□が最大の要件である」と表示される。そして、□に基づかない諸宗は、あるものは□すら知らない。それにもかかわらず、諸宗が□を説くのは、□に基づいて□を説いた□大師の教えを□ものであると厳しく糾弾されている。

◆「仏教又かくの……人これをしらず」（189ページ18行目～190ページ7行目）

中国に種々の經典が雑然と伝わったために混亂が生じ、□時代には□と呼ばれる諸宗が生まれた。□大師が登場して、諸經典を吟味して位置づけ、□そが□の□であることを明らかにして、混亂を收拾した。

しかし、その後に伝わった□宗・□宗・□宗によつて、仏法は再び混亂した。

◆「日本・我朝には……破れなんとする」（190ページ8行目～17行目）

日本では□時代までに□宗などの□が伝来したが、それらの有力諸宗では争いが続いていた。□時代の初めに□大師が登場し、□が最も優れていること、また□宗が□の□を盗み取つたことを明らかにし、その争いを收拾した。ところが、□が近くなつていて、人々の智慧が劣る時代になつてゐたので、□大師が確立した□第一の□宗の正しい法義が伝えられなくなり、他宗の勢力が拡大していつた。そのうえ、新興の□宗や□宗などの教えよりも劣勢となり、最初は□、最後には□までが諸宗に移つてしまつた。その結果、□も□の□を得られず、国を去り、□・□が入り込み、國土が乱れた。

◆「此に予愚見をもつて……久遠実成なるべし」（190ページ18行目～191ページ1行目）

諸經と□の大きな違いとして、□で説かれる□と□で説かれる□の二点が指摘される。

◆「法華經の現文を……疑網をなすべき」（191ページ1行目～9行目）

□で□の弟子たちに□がなされた」とを挙げ、□が明かされた」とを述べられている。

◆「而れども爾前の諸經も……あしかりぬべしと・しりぬ」（191ページ10行目～193ページ15行目）

諸經典の文を挙げ、□を説く□に対し、法華經□の膨大な諸經では、□が□できず、また□もすべきでないと厳しく糾弾されていた」とを示されている。

◆「雨るを後八年の……眼なるべし」（193ページ16行目～195ページ6行目）

□がそれ以前の諸教と正反対に□を説いたことは「□と非難されても仕方がない」といふが、□の教えが正しいことは、□ならびに□の□の諸仏が「ぞつて正しいと□した」とを示されている。

◆「但在世は四十余年を……なげかせ給うらん」（195ページ7行目～196ページ1行目）

□だけに説かれる□は、□も□した事実であるが、□の人々は多くの□に惑わされ、□を信じられない」とを示している。

◆「住劫・第九の滅・人寿百歳の時・師子類王には……那由佗劫なり」等云々（196ページ2行目～197ページ9行目）

□が□・□では説かれず、□に至つて初めて明かされた」とを□をたどりながら示されている。「□では、□が□に生まれ、□歳で出家し、□歳で成道した」という□が□の一貫した立場であることが述べられているとともに、□においてさえも、□を説いている点では変わらない」と表示されている。

そして、□の正宗分である□以後にいても、□では、まだ□の仏を説いている」と述べられている。□の□の立場を一言で打ち破つたのが、□の□Aの一説である。

経文II

法華蓮の 教學試験発心教材④ / 開目抄 問答篇(1) 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「華嚴・乃至般若……一品には付くべき」(197-10行目～198-8行目)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「権を開せずして迹門の一念三千をかくせり」(197-11行目)について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

問二 「爾前二種の失・一つを脱れたり」(197-13行目)について、具体的かつ簡潔に説明しなさい。

問三 「發迹顯本」(197-13行目)について、簡潔に説明しなさい。

問四 「本因本果の法門なり」(197-16行目)について、述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

さらに、「A・B・C」には法華經の経文があてはまります。その経文をも答えなさい。

寿量品の文上では、「A」と説かれ、□の真実の成仏は計り知れない□の昔のことであつたと明かされます。さらに、「B」とも説かれ、□の仏は□すなわち□です。

次に本因については、「C」と説かれます。□である□が□であるとともに、□である□における□の□生命が、□の□である□を断じて、□の□を成就するといつ爾前諸経の成仏觀とは大きく異なるのが、□の□です。しかし、日蓮大聖人の仏法における□の□は、凡夫が初めて□を聞いて信受し、果てしない□の実践を決意するが□である。そして、その凡夫の生命に永遠の□の□を涌現する」とをもつて□とするです。

A II

B II

C II

問五 「九界も…一念三千なるべし」(197-16行目～17行目)について、日蓮仏法の文底に則して簡潔に説明しなさい。

問六 「法身」(198-7行目)「応身・報身」(198-9行目)について、具体的に説明しなさい。

法身 II

応身 II

報身 II

問七 「涌出・寿量の一品には付くべき」(198-8行目)について、具体的に説明しなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑤／開目抄 問答篇四 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「されば法相宗と……答えをかまうべし」(189^年-9行目～203^年-14行目)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「されば法相宗と……悪道に墮つべし」(189^年-5行目～200^年-1行目)の大意について述べられている次の文中の [] においてはまる語句を答えなさい。
[] は、衆生はその本性で五つに分けられ、それらは相いれない(性格別)と説き、そのうち [] のない [] と、[] に成る」とが決まつている「 [] の [] 」は [] できないとする。次いで、[] と [] は、[] にしか説かれていないと、[] が、それぞれのよりどころである[] と [] に反する邪義を主張しているが、それは [] が諸経で [] している通り、[] の [] 、[] の [] の様相である」とを指摘されている。

問二 「大通結縁の第三類」(200^年-5行目)について、大通結縁の衆生の三類をそれぞれ説明しなさい。

- 第一類Ⅰ
- 第二類Ⅱ
- 第三類Ⅲ

問三 「宝塔品の六難九易」(200^年-14行目)について、本抄で引用されている三つの譬えを、それぞれ書きぬいて答えなさい。

問四 「法華經は一句一偈も末代に持ちがたし」(200^年-15行目)について、大聖人は本抄でどのように指摘されているかを答えなさい。

問五 「強盛の菩提心を・をして退転せじと願しぬ」(200^年-16行目)について、菩薩が初めて発心した時に起つて「四弘誓願」を具体的に説明しなさい。

問六 「數數擣出見れん」(201^年-5行目)にあてはまる法難を、起つた年(元号)月日・法難名をすべて順に答えなさい。

問七 「障り未だ除かざる者を怨と・嫉と名く」(201^年-9行目)について、本抄ではどのような譬えで示されているかを答えなさい。

問八 「定んで天の御計いにも・あらざるか」(202^年-9行目～10行目)について、大聖人は本抄でどのように仰せかを答えなさい。

問九 「法華經の第五の巻・勸持品の二十行の偈」(2002^年-11行目)について、本抄より選び、それぞれ答えなさい。

問十 「此の疑は此の書の肝心・一期の大事」(203^年-11行目)について、具体的に答えなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑥／開目抄 問答篇五 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

問 「季札といひし者は……御弟子にあらずや（203^ペ15行目～214^ペ18行目）の御文の大意について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。また、□Aにあてはまる法華経の經文を、本抄の御文を参考にして答えなさい。

◆「季札といひし者は……も亦報すること能わし』等云々」（203^ペ15行目～205^ペ5行目）
初めて□が許された□こそ、□に大恩があり、□の□がないことといひて、まず□すべき者たちを順に挙げられ、法華経で

◆「諸の声聞等は……いよいよつもり候」（205^ペ6行目～207^ペ9行目）
まず諸經典での□に対する厳しい責めを詳細に挙げる。その□の□を説いた□に、□は深い恩があることが示される。その□が誓いどおりに□の□を□しないことは不思議であると、疑問を一段と強められている。

◆「又諸大菩薩天人等の…とかせ給うも・これなり」（207^ペ10行目～208^ペ10行目）
□に続いて、□について検討する。まず□たちは、□以前には□から学ぶべきものがなく、むしろ□の師あるいは□ともいえるべきものであったと指摘されたい。

◆「仏・御年・七十二の…いまだきかずと領解せり」（208^ペ11行目～210^ペ4行目）
□の開經である□では、「□と述べて、それ以前に説かれた經々には□が説かれていなかつた」とが明示された。

◆「又今よりこそ諸大菩薩も…をどろきし意をかかれたり」（210^ペ5行目～211^ペ4行目）
先に見たように、□では前代未聞の□の教えが説かれたが、それを聞いた□たちは、驚きのあまり直ちに信ずることができなかつた。この「眞足の道」について、諸經や種々の法釈を引いて、それが□を聞きたいと願つた。この「眞足の道」について、諸經や種々の法釈を引いて、それが□であることを明かされている。

◆「其の上に地涌千界の…きかずと申すなり」（211^ペ5行目～212^ペ7行目）
品第□の□の□の諸仏が集まる」として、釈尊の仏としての長期間のふるまいが示唆されたが、□では、釈尊の呼びかけに応じて□を担うべく、大地の下から無数の□の中には、□が現れる。「れほど多くの□が現れる」とが□の□の□であるためには、□の□が必要である。このようないくつかの□が皆の心に生じ、□に尋ねるのである。

◆「仏此の疑を答えて云く・寿量の一品の大切なるこれなり」（212^ペ8行目～213^ペ12行目）
この」といふて、□が□の□に□したことがあらざ示された。これが□である。それでも□は、聴衆には到底信じられないものであった。

◆「其の後・仏・寿量品を…なりと・やぶるもんなり」（213^ペ13行目～214^ペ18行目）
品第□の□で□と説いて、□をまさしく打ち破り、□の□の□である□を示される。この文の前半は、□が今世で□して以来、□の最後の□品第□にいたるまで、大菩薩をはじめあらゆる人々が、釈尊は今世で初めて□した□に実は□をしていたといつて、□は無量百千万億那由他劫という□では、そうではなく、□は□である迹化・他方などの□も□の□の末流の□となる。したがつて、その諸仏の□を守る□も、□の□の□の□なのである。

◆「此の過去常顯るる時・御弟子にあらずや」（214^ペ1行目～18行目）
劫初から、□の□に至りて□の□そ一切衆生に對して□の□であることが明らかとなつたのである。

法華蓮の 教學試験発心教材⑦ / 開目抄 問答篇六 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「而るを天台宗より……一箇のいさめんぬ」(215番-1行目～223番-14行目)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「本尊」(215番-1・3・4・6行目)・「法華經の種」(同番-16行目)について、具体的に説明しなさい。

また、「本尊」について、「御義口伝」ではどのように仰せかを答えなさい。

御義口伝＝

問二 「今者已満足の文」れなり」(217番-1行目)について、具体的に説明しなさい。

問三 「疑て云く當世の…下にかべし」(217番-10行目～218番-9行目)で述べられている「三箇の勅宣」を具体的に説明しなさい。

問四 「第三の諫勅なり」(218番-8行目)について、「六難九易」にあてはまる御文を本抄より書きぬきなさい。

問五 「已今當」(219番-17行目)について、具体的に説明しなさい。

問六 「教の淺深をしらざれば理の淺深を弁うものなし」(220番-8行目)について、具体的に説明しなさい。

問七 「六難九易」(223番-4行目)の意義について、述べられている伝教大師の文を、御書より選び答えなさい。

問八 「二箇の諫曉あり」(223番-5行目)について、その意義を答えなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑧ / 開目抄 問答篇(七)

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「已上五箇の鳳詔に……三類の怨敵にあらずや」(2233^ビ-15行目～2293^ビ-9行目)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答へなさい。

問一 「五箇の鳳詔」(2233^ビ-15行目)について、説明しなさい。

問二 「頽はねられぬ」と「魂魄」(2233^ビ-16行目)を用いて、大聖人の「發迹顛本」を説明しなさい。

問三 「唯願くは…數数擣出せられん」(2243^ビ-1～8行目)を、「三類の強敵」に配しなさい。

第一類||

第二類||

第三類||

問四 「初に一行は…以ての故に」(2243^ビ-9行目～11行目)について、具体的に説明しなさい。

問五 「夫れ鷲峯・雙林の…三聖の怨敵にあらずや」(2253^ビ-8行目～2273^ビ-15行目)の大意について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

まず□の□を明かした経文に、日蓮大聖人の御在世当時の諸宗の□の様相が全く一致していることを指摘され、□が□であるとする他の経文を再度確認される。□の今日に□の□がいることが明白なら、彼らが□する相手である□が□がいることも確実であると示される。そのうえで、外典でも□が当たる例や付法藏経の□が□した例を挙げ□の□もまた現実のものとなることを明確にされる。次に、□のうち、第□の□と第□の□について明らかにされている。□の□が□であることを保証し□を図つたのに対して、□ら□が□こそ□の□であることを□では□よりも前に□を失つてしまつ」という邪説を広めたのは、これらの□に対する□であると□されている。

問六 「第三は、法華經に…怨敵にあらずや」(2273^ビ-16行～2293^ビ-9行目)について、僭聖増上慢の惡の本質を明かされている御文を、本抄より書きぬきなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑨ / 開目抄 問答篇八 問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「当世の念仏者等……願やぶるべからず」(230~10行目～232~6行目)の御文について、あととの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「当世の念仏者等……行者」というべきか」(230~10行目～18行目)の大意について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

当時の日本に□の□がいない」と述べられている。
まず、本来は□を□すべき□宗の僧たちまで、□に屈服する」といたでいる現実を指摘されている。また、世間的な悪事で流罪されたり非難されたりしている□も、□のために□を受けたではないから、□の□ではない」とが示される。これに対して大聖人の場合は世間の罪によって難に遭われたのではなく、その「どじくが□された」とによるものであり、したがって、□こそ□の□であるといえる」とが示されている。

問二 「仏と提婆とは身と影のとし生生にはなれず」(230~5行目)について、具体的に説明しなさい。

問三 「天の諸の…白癡の病を得ん」(230~9行目～12行目)について、引用されている経文を、「行者守護」(法華經の行者は諸天善神の加護を受け、現世安穏となる)と「誇者現罰」(法華經の行者に対して誹謗・迫害を加える者は現罰を受ける)にそれぞれ配しなさい。

行者守護

誇者現罰

問四 「不輕品に云く…かんがへたるがいし」(230~13行目～231~18行目)について、法華經の行者が大難を被つても諸天善神の加護がないことや迫害者に現罰が現れない理由を、大聖人はどのように仰せになっているかを二点答えなさい。

問五 「詮するところは天もすて給え諸難にもあえ身命を期とせん」(232~1行目)について、大聖人の御心境を推察しなさい。

問六 「身子が…塵なるべし」(232~1行目～5行目)について、具体的に説明下さい。

問七 「我日本の…大船とならむ」(232~1行目～5行目)について、主師親の三徳にそれぞれ配しなさい。

主徳

師徳

親徳

法華蓮の 教學試験発心教材⑩ / 開目抄 問答篇九

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「疑つて云くいかにして……大樂を・うくべければ大に悦ばし」(2332^{タメ}-7行目～237^{タメ}-終)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「善男子過去に……或は王難に遭い」(2332^{タメ}-8行目～10行目)について、具体的に説明しなさい。

問二 「余の種種の……由るが故なり」(2332^{タメ}-10行目～11行目)について、「転重輕受法門」ではどのように仰せかを答えなさい。

問三 「今日蓮・強盛に……招き出だせるなるべし」(2333^{タメ}-2行目～4行目)について、具体的に説明しなさい。

問四 「譬えば貧女の……自ら至るが如し」(2333^{タメ}-6行目～12行目)について、具体的に説明しなさい。

問五 「我並びに我が弟子・…わするるなるべし」(2334^{タメ}-7行目～9行目)について、この御文に呼応する御文を本抄より選び答えなさい。

問六 「妻子を不便と…返てみちびけかし」(2334^{タメ}-9行目～11行目)について、具体的に説明しそう。

問七 「夫れ仏に両説あ…國かと・しるべし」(2334^{タメ}-14行目～2335^{タメ}-13行目)について、「摂受」「折伏」をそれぞれ具体的に説明しなさい。
摂受||
折伏||

問八 「若し善比丘法を…仏法中の怨なり」(2336^{タメ}-11行目～15行目)について、具体的に説明しそう。

問九 「夫れ法華經の宝塔品を…是れ彼が親等云々」(2336^{タメ}-16行目～237^{タメ}-6行目)について、具体的に答えなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑪／生死一大事血脉抄

〈青年部 教學試験2級対応版〉

本抄『生死一大事血脉抄』について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 本抄が執筆された背景や対象衆・題号について述べられている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

本抄「生死一大事血脉抄」は、□年□月□日、□歳の時、流罪地、□で認められ、□に与えられたとされている。

同年□月□日

□、佐渡だけでなく、各地から多くの□などの諸宗の法師・僧侶が集まつて、大聖人を処分せよとの声に□の□に示されるよう、□たちの憎悪は強く、そのため幕府の要人から敵視された大聖人は、絶えず命の危機にさらわれる日々であった。一方で、□、□は、本抄の他に□、「□」など重書きをいただいたとされる。

□・本間重連は、□において法論によつての決着を申し渡す。その結果、悉く大聖人に完膚なきまでに破折されるのであつた。

〔種種御振舞御書〕(9-17-12行目～)参照)

□の□とされる□は、京都出身の□について、□は、本抄の他に□、「□」など重書きをいただいたとされる。本抄の題号にある「生死一大事」とは□と□を繰り返して流転する生命において根本の大事、□の□また、「□」とは、法が□から□へと伝えられていくことを□から□へ□が受け継がれる」とに警えられた表現である。

したがつて、「生死一大事血脉」とは、□から□に伝える根本的に重要な□の□を意味する。

問二 本抄の大意について述べられてる次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。

本抄では、初めに、生死一大事血脉の□とは□であり、それは□で□・□の二仏から□に悪世での□を託された極めて重要な法であり、また、□の□字は無限の過去から常に生命に具わっている□にあるとされている。

そして、あらゆる生命の□、また、あらゆる事物の生成・消滅は、全て「□」の□であり、□の起滅であるとされ、□が万物の□と因果を貫く宇宙根源の法であることを明かされている。これにより、□の全ての□の□は□の□である」とになる。また、□・□の二仏も□の一法を表しているとされる。

次に、□が生死一大事の□と究極の□と、私たち□の生命の三つがともに□であり、全く□がないと信じて南無妙法蓮華経と唱える信仰に生死一大事血脉がある。

第一に、究極の□と究極の□と私たちは□を受けるためには、どのような信心の姿勢に立べきかを、以下の点において教えられている。

第二に、ひと度、□を信受し、□すれば、□世・□世・□世・□世の□世にわたつて、それが□を超えて途切れることなく続き、□と導かれるのである。ただし、それを断ちきるのが□・□である。どうでも現在の□の信心によつて、□は途切れず、□が実現できるのである。

第三に、□の根本の□である□に深い□があることが述べられるとともに、□が仏法の極理を質問された」とに対し、前代未聞のことであると喜ばれて、大聖人が□の役割を担つている」とを示唆されている。

最後に、生死一大事血脉の□とは「信心の□」であると結論され、一層強情な信心を起すよう激励されて本抄を結ばれている。次に、大聖人と□の□があることが述べられるとともに、□が仏法の極理を質問された」とに対し、前代未聞のことであると喜ばれて、大聖人が□の役割を担つている」とを示唆されている。

問三 「釈迦多宝の二仏宝塔の中にして上行菩薩に譲り給いて」(13336-1行目～2行目)について、具体的に説明しなさい。

問四 「妙法蓮華經の五字過去遠遠劫より已來寸時も離れざる血脉」(13336-2行目～3行目)について、具体的に説明しなさい。

問五 「妙は死法は生なり」(13336-2行目～3行目)について、具体的に説明しなさい。

問六 「当体蓮華」(13336-3行目～)について、具体的に説明しなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑫／生死一大事血脉抄(二)問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

「然れば久遠実成の……城者として城を破るが如し」(一三三七~一四行目)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「久遠実成の积尊」「皆成仏道の法華經」(一三三七~一2行目)について、それぞれ具体的に説明しなさい。

积尊 ॥

法華經 ॥

問二 「三つ全く差別無しと解りて妙法蓮華經と唱え奉る」(一三三七~一3行目)について、具体的に説明しなさい。

問三 「臨終只今」(一三三七~一4行目)について、具体的に説明しなさい。

問四 「過去の生死・・・法華經を離れ切れざる」(一三三七~一10行目)について、具体的に説明しなさい。また、『総勘文抄』ではどのように仰せかを答えなさい。

総勘文抄 ॥

問五 「仏に成るべき種子を断絶する」(一三三七~一11行目)について、『新池御書』ではどのように仰せかを答えなさい。

問六 「自他彼此の心」(一三三七~一12行目)について、具体的に説明しなさい。

問七 「水魚の思を成して」(一三三七~一12行目)について、具体的に説明しなさい。

問八 「異体同心」(一三三七~一12行目)について、『異体同心事』ではどうのように仰せかを答えなさい。

法悔蓮の 教学試験発心教材⑬／生死一大事血脉抄三 問題

〈青年部 教学試験2級対応版〉

「日本國の一切衆生に……委細の旨又申す可く候、恐恐謹言」(13337~14行目~13338終)の御文について、あとの問い合わせに簡潔に答えなさい。

問一 「日本國の一切衆生に法華經を信ぜしめて仏に成る血脉を継がしめんと」(13337~14行目~15行目)について、具体的に説明しなさい。
また、この御文に関連する法華經の経文を答えなさい。

経文Ⅱ

問二 「火も焼く^ム能わ^ズ水も漂わ^ス能わ^ズ」(13337~18行目)について、具体的に説明しなさい。

問三 「在在諸仏土 常与師俱生」(13338~1行目)について、具体的に説明しなさい。

問四 前問の経文について、戸田第2代会長はどのように仰せかを答えなさい。

問五 「火は燒照を以て行と為し・天は潤すを以て行と為す」(13338~4行目~6行目)について、具体的に説明しなさい。

火^ニ

水^ニ

風^ニ

地^ニ

空^ニ

問六 前問の『地水火風空』の五大力用のうち、『地水火風』の四大力用について、日寛上人が指南されている次の文中の□にあてはまる語句を答えなさい。
「火は^ニれ空^ニ上る、故に□は火大なり。風は辺際無し、故に□は風大なり。水はこれ□なり、故に□は水大なり。地はこれ万物を□す、故に□は地大なり」

問七 「生死一大事の血脉此れより外に全く求むることなかれ」(13338~9行目)について、具体的に説明しなさい。

問八 「煩惱即菩提・生死即涅槃」(13338~9行目)について、具体的に説明しなさい。

法華蓮の 教學試験発心教材⑭／日顯宗を破す（一）問題

〈青年部教學試験2級対応版〉

日顯宗について、あととの間に簡潔に答えなさい。

問一 仏法を実践していく上で、一番大事なことである人々の心を惑わす惡縁の「一凶」と戦い抜くことを教えられている御文を二つ答えなさい。

問二 現在の日蓮正宗を「日顯宗」と呼ぶ理由を答えなさい。

問三 日蓮大聖人が、「法華經の敵」を徹して責め抜けと仰せの御文を二つ答えなさい。

問四 仏法上の大罪である「五逆罪」をすべて答えなさい。

問五 末法での弘教を誓った「四菩薩」について、『觀心本尊抄』(はんじゆうしやく)のように仰せかを答えなさい。

問六 日蓮大聖人が、仏法西遷と世界広宣流布を予言された御文をそれぞれ答えなさい。

仏法西遷Ⅱ

世界広布Ⅱ

問七 「第一次宗門事件」について答えなさい。

問八 「第二次宗門事件」について答えなさい。

問九 平成5年(1993年)に、学会が御形木御本尊(日寛上人書写)を全世界の会員に授与していくことを決定した正統性を、御書を以て答えなさい。

問十 日興上人の根本精神は、どのような遺誠であるかを答えなさい。

法悔蓮の 教學試験発心教材⑯／日顯宗を破す(二)問題

〈青年部 教學試験2級対応版〉

日顯宗について、あとの間に簡潔に答えなさい。

問一 法主や学僧が誤りを犯した場合、どのように対処すべきかを御書を以つて答えなさい。

問二 「血脉」について、①妙法を自らの当体として信受する信心、②絶対不退の信心の持続、③異体同心に広宣流布を目指す信心、以上の3点について大聖人はどのように仰せになられておられるかを答へなさい。

①||

②||

③||

問三 「三宝義」について、日顯宗はどのように主張しているかを答へなさい。

問四 日蓮大聖人と日興上人は、僧侶の在り方について、どのように仰せになられているかをそれぞ答へなさい。

大聖人||

日興上人||

問五 日蓮大聖人は仏法利用の悪侶について、どのように仰せになられているか、三つ答へなさい。

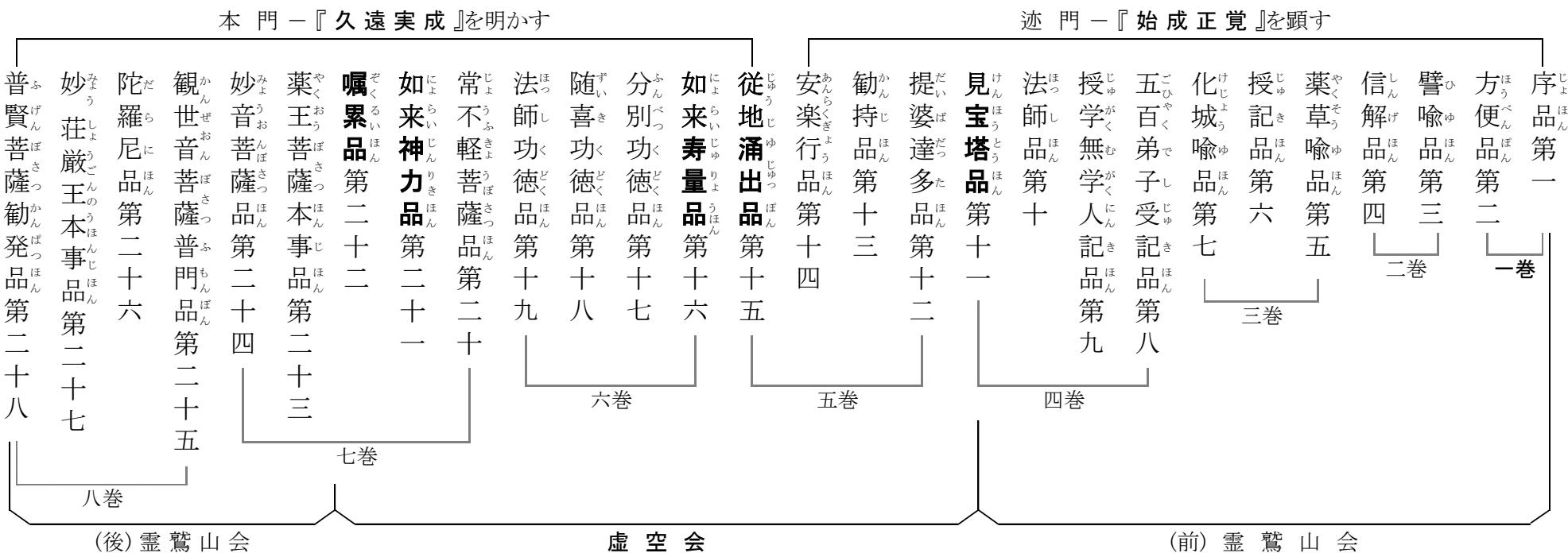
問六 日顯宗が主張している数々の邪義について、御書を用いてそれぞれ破折しなさい。

(一) 「学会が授与する御本尊は、法主の『開眼』がないから功徳がない」と喧伝していること。

(二) 「本仏大聖人、戒壇の大御本尊、歴代の御法主上人が、その内証において、一体不二の尊体にまします」という法主絶対論・法主信仰。

(三) 平成2年12月、学会宛てに送られたきた宗門総監名での葬儀に関する「通告文」なる文書の中の「僧侶を呼ばずに葬儀を行えば、即身成仏どころか必定墮地獄となります」という化儀の悪用。(二御文)

(四) 平成3年10月、学会宛てに送付された宗門総監名での葬儀に関する「通告文」なる文書の中の「僧侶を呼ばずに葬儀を行えば、即身成仏どころか必定墮地獄となります」という化儀の悪用。(二御文)



『虚空会』での説法のあらすじ

宝塔品…巨大な塔[宝塔]が出現し、仏の滅後の弘教の難しさを説き、菩薩たちへ弘教の決意を促(うなが)す。

提婆達多品…「悪人成仏」・「女人成仏」を説く。

勸持品…菩薩たちが迫害を恐れずに弘教することを誓う。

安樂行品…法華経を弘(ひろ)める方法を説く。

涌出品…無数の地涌の菩薩が大地を割って躍り出てくる。

寿量品…釈尊が「永遠の仏」を説く。

分別功德品～法師功德品…弘教による功德を説く。

不輕品…「法華経を弘める者」の福德と、その「弘教者」を毀(そし)る者の罪を説く。

神力品…地涌の菩薩に仏の滅後の弘教を託(たぐ)す。

⇒別付嘱(べつふぞく)[結要(けつちよう)付嘱ともいう]

嘱累品…すべての菩薩・諸天に託す⇒総付嘱(そうふぞく)

『虚空会の儀式』⇒ 仏の滅後において、「弘教を“だれ”に託すか」ということを明らかにする付嘱の儀式なのである。

実は、宝塔品の中程から嘱累品の終わりまでに説かれているこの『虚空会の儀式』は、“おとぎ話”なんかないのであります。私たちが御本尊の前に端座し、勤行・唱題する姿こそ『虚空会の儀式』なのです。そして、この時御本尊に広宣流布の誓いを立てることこそが「付嘱の儀式」なのです。

『法華経の智慧／第5巻』で池田先生は、一付嘱の儀式を通して、末法に、この御本尊を所持している「人」を指示し、最大に称賛したのです。(中略)「二処三会」には、深い意義があった。それは法華経全体の構成によって、「現実の世界から『永遠の生命の世界』へ」(靈鷲山から虚空会へ)、そしてまた「現実の世界へ」(虚空会から靈鷲山へ)という“人間革命のリズム”を示している。(p.322～325)

【参考資料】

◆六難九易 ～見宝塔品第十一～

九つの易しい」とは、本来なら大難事ではあるが、仏滅後において法華經を受持する六つの行いの方があるに難しい」とと説き示している。

諸余經典	數如恒沙	雖說此等	未足為難	①	
若接須弥	擲置他方	無數佛土	亦未為難	②	
若以足指	動大千界	遠擲他國	亦未為難	③	
若立有頂	為衆演說	無量余經	亦未為難	④	
於我滅後	若自書持	能說此經	是則為難	⑤	
於惡世中	若使人書	是則為難	⑥	若使有人有手、把虛空而以遊行、亦未為難	
若以大地	置足甲上	是則為難	⑦	若以有頂に立つて衆の為めに無量の余經を演説せんも亦た未だ難しと為さず	
於我滅度後	若持此經	是則為難	⑧	若し須弥を接つて他方の無数の仏土に擲げ置かんも亦た未だ難しと為さず	
於惡世中	暫讀此經	是則為難	⑨	若し足の指を以て大千界を動かし遠く他国に擲げんも亦た未だ難しと為さず	
若持八萬	四千法藏	是則為難	⑩	若し足の指を以て手に虚空を把つて以て遊行すとも亦た未だ難しと為さず	
若人說法	令千万億	是則為難	⑪	若し有頂に立つて衆の為めに無量の余經を演説せんも亦た未だ難しと為さず	
得阿羅漢	具六神通	是則為難	⑫	若し佛の滅後して悪世の中に於いて能く此の經を説かば是れば則ち難しと為す	
於我滅後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅後して悪世の中に於いて能く此の經を説かば是れば則ち難しと為す	
我が滅度後	於我滅後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは自らも書き持ち若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す
我が滅度後	於我滅度後	若能奉持	如斯經典	是則為難	若し佛の滅度後に於いて若しは人をしても書かしめば是れば則ち難しと為す

『現代語訳』

- ① 多くのそれ以外の經典は、その数がガノジス河の砂の」と多く多数ある。」これらを説いても、まだ難しいとなすには足りない。
- ② もしも須弥山を取つて、他方の無数の仏国土に、投げ置こうとする」とも、またまだ難しいとはしない。
- ③ もしも足の指をもつて、三千大世界を動かして、それを遠く他国に投げる」とも、またまだ難しいとはしない。
- ④ もしも有頂天(宇宙の頂点)に立つて、人々のために、無量のそれ以外の經典を演説しても、またまだ難しいとはしない。
- ⑤ (けれども)もしも仏の入滅したのに、悪世に中において、よくこの經を説く」とがあるならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑥ たとえあるひとが手に虚空をとらえで、そつしてあちらこちら遊行しても、またまだ難しいとはしない。
- ⑦ (けれども)わたくしが入滅したのち、もしくはみずから書いて受持し、もしくはひとに書かせるならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑧ もしも大地をもつて、足の爪の上に置いて、そつしたまま、梵天にのぼって行くとしても、またまだ難しいとはしない。
- ⑨ 仏が入滅したのに、六神通を獲得させるならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑩ たとえ世界の破壊である却のはじめのころに大火災がおこつているときに、乾いた草を背中に荷つて行つて、その火の中に入つても焼けないというのも、またまだ難しいことはしない。
- ⑪ わたくしが入滅したあとに、もしもの經を受持して、一人のためでもの經を説くならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑫ もしも八万四千という仏教全体の教えの蔵と、十二部經とを受持して、ひとのために演説し、多くの聽くものに、六神通を獲得させるならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑬ わたくしの入滅したのちにおいて、この經を聞いて受持し、その意義趣向を問うならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。
- ⑭ もしもあるひとが法を説いて、千万億の、無量無数で、ガノジス河の砂の数ほど多數の生あるものたちを、みな聖者の位を得て、六神通をそなえさせるならば、その利益はそれだけあるとはいっても、またまだ難しいとはしない。
- ⑮ わたくしが入滅したあとにおいて、もしもよく「のよつな經典を受持し尊ぶならば、「これ」そすなわち難しいとするのである。

【参考資料】

◆ 三類の強敵と勧持品第十三 』一十行の偈』

未法悪世の時代に、法華經を弘める者には必ず「三類の強敵」が出現する」とが示されている。

- 唯願不為慮於仏滅度後恐怖惡世中我等當弘說
 うよくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 有諸無智人惡口罵詈等及刀杖者我等皆當忍
 あくめりかくふめつじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 惡世中比丘邪智心詔曲不得謂為得我慢心充滿
 わくあれきじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 或有阿練若納衣在空閑自ら真之道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん
 どんじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 貪著審故如六通羅漢の如くならん
 せんしゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 作此經典説惑世間故分別說是經
 せきじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 由世恭敬如六通羅漢の如くならん
 ひやくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 常在大臣中欲毀我等故好出我等過
 せんじゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 及余比丘衆誹謗說我惡謂是邪見人
 いそひよくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 說外道論議說外道論議
 我等敬故悉怨是諸惡為斯所輕言汝等皆是
 がくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 如此輕慢言皆當忍受之濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 此輕慢言皆當忍受之濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 悪鬼入其身罵言毀辱我等敬信
 あくめりかくふめつじゆうじゆく
 說外道論議說外道論議
 忍此諸難事為說是經故忍此諸難事
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 不知仙方便隨宜所說法濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 遠離於塔寺如是等衆惡念仏告勅故皆當忍是事
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我不愛身命但惜無上道
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 等於來世護持所屬世尊所當知濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 不知仙方便隨宜所說法濁却惡世中多有諸恐怖
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 遠離於塔寺如是等衆惡念仏告勅故皆當忍是事
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 諸聚落城邑其有說法者皆到其所說仏所曠法
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我是世尊使如是等衆惡念仏告勅故皆當忍是事
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我於世尊前諸來十方佛發如是誓願
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 佛自知我心
 じゆうじゆくめらんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 唯大願わくは慮いを為したまわざれ仏の滅度の後恐怖惡世の中於いて我れ等は當に広く説くべし
 たただれんあくめりかくふめつじゆうじゆく
 諸の無智人の惡口罵詈等及び刀杖者我れ等は皆當に忍ぶべし
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 惡世中の比丘は邪智にして心詔曲に未得ざるを謂いて得たりと為し我慢の心充滿せん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら真の道を行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 利養に貪著するが故に白衣の与めに法を説いて世の恭敬する所と為ること六通の羅漢の如くならん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 是の人は惡心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮つて好んで我れ等が過を出さん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 も私はの如き言を作さん此の諸の比丘等は利養を貪らんが為めの故に外道の論議を説く
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 自ら此の經典を作つて世間の人を誣惑す名聞を求めるが為めの故に分別して是の經を説くと
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 常に大衆の中に在つて我れ等を毀らんと欲するが故に國王大臣婆羅門居士
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が惡を説いて是れ邪見の人外道の論議を説くと謂わん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我れ等は仏を敬うが故に悉くは是の諸悪を忍ばん斯れ忍しみて汝等は皆みな是れなりと言ふ所と為らん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我れ等は仏を敬うが故に悉くは是の諸悪を忍ばん斯れ忍しみて汝等は皆みな是れなりと言ふ所と為らん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 此の如き輕慢の言を皆な當に忍んで之を受くべし濁却惡世の中には多く諸の恐怖有らん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 悪鬼其の身に入つて我れを罵詈毀辱せん我れ等は仏を敬信して當に忍辱の體を著るべし
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 是の經を説かんが為めの故に此の諸の難事を忍ばん我れは身命を愛せず但無上道を惜しむ
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我れ等は來世に於いて仏の囑する所を護持せん世尊は自ら當に知しめすべし濁却惡世の惡比丘は
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 仏の方便宜しきに隨て説きたまう所の法を知らず惡口で嘲笑し數數擇出せられ
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 塔寺を遠離せん是の如き等の衆悪をも仏の告勅を念うが故に皆な當に是の事を忍ぶべし
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 諸の聚落城邑に其法を求むる者有らば我れ皆みな其の所に到て仏の囑する所の法を説かん
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我れは是れ世尊使なり衆に處するに畏る所無し我れは當に善く法を説くべし願わくは仏よ安穩に住したまえ
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 我れ世尊の前諸の來りたまえる十方の仏に於いて是の如き誓言を發す
 もろもろむちのなかひくひとあくめりかくふめつじゆうじゆく
 佛は自ら我が心を知しめせ

『現代語訳』

〔妙法蓮華經並開結417~421〕

- ① ただ願わくは御心配なさいませんように。仏が入滅されてから後、恐ろしい怖れのある惡世の中に於いて、我らは當に広く説くであろう。
- ② 多くの無知の人が悪口をいい、罵り及び刀杖を加える者があるうとも、我らは皆當にそれを忍ぶであろう。
- ③ 惡世の中の比丘は、まちがつた智をもつてて、心に「ひ、詔（へら）い」があり、まだ得ていらないものを、すでに「れを得たと思」、我執の心が充满しているであろう。
- ④ あるいは山林の静かな場所で、ボロ切れを継ぎ接ぎした衣を着て、誰もいないところにいて、自ら真実の道を行じていると思つて、人間を軽んじ蔑しめている者があるであろう。
- ⑤ 財産を貪り自己の利益を求める」とに貪著しているが故に、在家の人々のために法を説いて、世間から恭敬される」とが、六神通を得た阿羅漢（聖者）の如くであろう。
- ⑥ この人が悪心を懷いて、常に世俗の」とばかり心にいつも思ひ、その名前のうえで、山林の静かな場所に住んでゐるところをよろこびに思ひ、我らの過失を数えあげることを好んでいる。
- ⑦ しかも「のよくな言葉をいふ」、「の多くの比丘たちは、財産を貪り、自己の利益を求める」とに貪著しているが故に、外道の論議を説き、
- ⑧ 由（ゆ）の經典を作成して、世間の人を説（だら）かし惑わせ、名聞を求めるようとするがための故、分別してこの經を説くのである。
- ⑨ このようになつて、大勢の人々の中で、我らをそしろうと欲するので、國王・大臣・バラモン・在家の人々、及びその他の比丘たちに向つて、我らを非難して悪口をいふ、我らの悪を説いて、「これはまちがつた考への人である。外道の論議を説くのである。
- ⑩ 悪鬼がその身の中に入ったような人は、我を罵り、そしり、辱めるであろうけれども、我らは仏を敬い、信しておつる」とによつて、必ず當に忍辱の體を身につけるであろう。
- ⑪ 我らは仏を敬いたてまつるが故に、悉くの多くの悪を忍ぶのである。彼らの為に輕々せられて、「汝らは皆これ仏なのだ」といわれても、
- ⑫ このような軽蔑した高慢な言葉を、皆當に我らはじつと忍耐して受けるであらう。濁りに満ちた却て惡世の中には、多くの恐ろしい怖れがあるのである。
- ⑬ 我らは来世に於いて、仏に委嘱されたといふを護持しよう。世尊は自ら當に御存知である。濁りに満ちた世の悪い比丘は、
- ⑭ この經を説かんがための故に、「の多くの困難な」とからに耐え忍ぼう。我は一身の命を愛するのではなく、ただ無上の仏道だけを惜しんでいるのである。
- ⑮ 塔や寺から遠く離れさせられてしまつ。
- ⑯ 我らは来世に於いて、仏に委嘱されたといふを護持しよう。世尊は自ら當に御存知である。濁りに満ちた世の悪い比丘は、
- ⑰ 多くの聚落や城市に、もしも法を求める者があるならば、我らは皆とのうに到り、仏に委嘱された法を説く。
- ⑱ 我は世尊の使者であるから、多くの人々に対処しても畏れるといふはない。我は當に善く法を説く。
- ⑲ 我は世尊の前と、多くの来集された十方の仏の前とで、以上のような誓願の言葉を發した。仏よ、どうか我の心を知られますように。
- ⑳ 我は世尊の前と、多くの来集された十方の仏の前とで、以上のような誓願の言葉を發した。仏よ、どうか我の心を知られますように。

『煩惱即菩提』と『生死即涅槃』の図解

